あなたと一緒に走る青春

DELF

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

本作は「小説家になろう」に投稿されている「シャングリラ・フロンティア～クソゲーハンター、神ゲーに挑まんとす～」の二次創作作品です。サンラクと秋津茜の恋愛ＩＦ的な内容になります。

※見苦しい文章やキャラ崩壊などがあります。予めご了承ください。

また、本作の前提として以下が挙げられます。

・初期プロットだったらしい秋津茜と陽務瑠美の同級生設定の採用

・夏休み最終版、クターニッド戦後からスタート

・オリジナルクソゲーの存在（突っ込みどころ満載）

内容としてはこんな感じになるかと思います（多分）

１，２話　導入パート

３～５話　交流を深めつつクソゲー攻略パート（かなり巻きで）

６，７話　恋愛パート

拙作ではありますが、楽しんでいただけたら幸いです。

３月２５日追記）新しく追加しました

８，９話　サンラク誕生日

目次

例えばそれはこんな出会いだったり ―― 1
ワゴンに行くのは理由がある ―― 6
センジョウノヘイシ ―― 12
傍から見ればアレ ―― 20
ゲームクリア、後に疑問 ―― 27
棘が一つずつ抜けていくように ―― 32
最初の一歩を、あなたと一緒に ―― 40
画面越しのあなたに、精一杯の想いを！ ―― 49
傍にある温もり ―― 61

例えばそれはこんな出会いだったり

夜の帳が下りた漆黒の墓地。本来静寂に包まれている筈のその場所からは、けたたましい物音が鳴り響いている。それは這いずり出る亡者の群れが鳴らす大地を割る音であり。あるいは首から上のない騎士が歩く際に鎧が鳴らす音であり。あるいは、あるいは、あるいは

―

「きゃあああああああああ！」

「うぉぉぉぉい、びびってないでお前も手伝えええええ！」

第４ステージ【死霊跡地】。その名が示すとおり、死者や悪霊と言った敵が登場する墓地の中を進むステージ。秋津茜…ではなく隠岐紅音…でもないアダーフライの言うことが正しいならば、このステージでゲーム全体の折り返しとなる、んだが…

「す、すいませんサンラクさ「グゥゥァァァァァァァァァァ！」イヤアアアアアアアアアアアア！」

これはかなりまずい。隠岐がこういったホラー要素に対して耐性がないというのは想定外だった。ええいそんないかにも女の子らしい叫び声を出すんじゃない、厳ついおっさんの姿でやられてもギャグにしかならないんだよ！

いやまあ怖いのは分からなくもない。俺も気を抜くとびくっとなるからな。ただ、実質俺一人でこのゾンビ共相手にするのは正直かなりきつい。というよりこのステージ、前回までのステージと比べてジャンルが違うのもそうだが難易度自体もかなり上がってる。第３ステージで武器を調達していなければ間違いなくゲームオーバーだった。

もしかして何かフラグでも踏んでたか？少なくともアダーフライのこの反応は、一度このゲームをクリアした者とは思えない。ここにくるまでも敵の配置や挙動が違うと言っていたし、その可能性は高そうだ。ただその条件は皆目見当もつかないし、このゾンビ連中が悠長

に考える時間を与えてくれるはずもない。どのみちこのままでは辿る結末は見えている、突き進むしか道はないんだよちくしょう！
あぁもう、どうしてこうなった！

■

クターニッド戦を終え、ようやく一息つくことが出来た。これから黒狼とのいざこざが始まるかと思うと面倒でしかないが…
現在夏休み最終日の午後。ログアウトしてから一眠りし、今目覚めたところだ。とりあえずカフェインだ、今の頭では回る頭も回らない…
と、寝ぼけた頭で扉を開けたため、扉の反対側にいた人物に気付くことが出来なかった。
「きゃっ」
「うおっ」
ぶつかりはしなかったが、結構きわどかったな今の。というかこの子誰？
「あー、すまない、当たったりしなかったか？」
「えと、はい、大丈夫です！」
中学生くらいの女の子だ。瑠美の友人か？しかし、どこかで見たことある気がする、それも最近。声も聞いたことあるような…どこでだ？
と、ここで瑠美が駆け寄ってくる。やっぱ妹の友人だったか。
「二人とも何やってんのこんなところで」
「部屋から出ようとしたらぶつかりかけたんだよ。どこにも当たってないみたいだからよかったけどな」
「お兄ちゃん気をつけてよ？全国ベスト８の紅音に何かあったら大変だよ？」
「瑠美ちゃん大げさだよ、ぶつかっててもなにでもないって」

「まあそうなんだろうけどね、心構えの問題よ」
　実際気を抜いていたのは確かだしな、言われてもしょうがないと俺も思う。
　…ん？何か引っかかる。瑠美はこの子を「アカネ」と呼んだ。つまりこの子の名前は「アカネ」。これも最近聞いたことある…って待て。
　顔に関してはお面をずらしているときにちらっと見た程度だが、それ以外の要素…声、話し方、そして「アカネ」という名前。すべての項目が当てはまるやつを一人知っている。というか、今朝までそいつと一緒にゲームをしてた。まさかこいつ…
「すまん、ちょっと聞いていいか？」
「？はい、なんでしょう？」
「間違っていたら申し訳ないんだが…もしかして、秋津茜か？」
「え…えぇっ!?どうして瑠美ちゃんのお兄さんがそれを!?」
　おぉっと、ビンゴだったわ。聞いておいてなんだが、シャンフロのアバターとリアルの外見そのまんまだな。狐面被ってるのってもしかしてそれが理由なのか？いやそもそもアバター作成時に外見変えてりゃよかっただけの話だよな。ならなんで…駄目だ、いまいち頭が回らん。ひとまず後回しだ。
「いきなり聞いて悪かったな、今朝ぶりではあるがサンラクだよ」
「え、サンラクさん!?瑠美ちゃんのお兄さんがサンラクさんだったんですか!?お会いできて光栄です！」
　すごいオーバーなリアクションで喜ばれた。そんなに喜ぶようなことか？いやまあ、ゲームの知り合いとリアルで会う機会なんて滅多にないか。俺もついこの前カッツォやペンシルゴンとあったばっかりだしな。それだって事前に会う約束してたわけだし、突然のことならこうなることもあるか。
「あ、自己紹介がまだでした。瑠美ちゃんと同じクラスの隠岐紅音といいます！よろしくお願いします！」
「あーうん、陽務楽郎だ。よろしく」
　オキアカネか、なるほどね。それで蜻蛉に関連したプレイヤーネームで統一してるんだな。

と、ここで部屋の中にあるアレを見つけたようで、目を輝かせながら聞いてくる。
「あ、もしかして業務用のＶＲ機ですか!?私初めて見ました！」
「…近くで見てみる？」
「いいんですか？ありがとうございます！」
開いてた扉から部屋に入り込みＶＲ機を見つめている。本当に素直というか、表情に出るというか…、うん、やっぱこいつ光属性だわ。どこかの外道共にも見習わせたいもんだ。
「お兄ちゃん、紅音と知り合いだったんだ。さっきの話から察するにゲーム？」
「ああ、同じクラン…あー、チームというか団体というか、所属が同じなんだよ」
「ふーん…」
「なんか気になることでもあるのか？」
「いやそういうわけじゃないんだけど…」
そう言ったきりなにやら考え込む瑠美。途中で話し切られるとすごい気になるんだが。とここで秋津…隠岐紅音が棚の方を見ているのに気付く。
「あれ、これって…」
「どうかしたか？」
「サンラクさんって危牧もプレイされていたんですね！あ、これもやったことあります。やったことあるゲーム結構被ってるんですね！」
「は!?」
え、こいつ危牧経験者？ていうか秋津茜が示した奴ってどれも結構なクソゲーだぞ。そういやこいつ便秘もやってたな…実はクソゲーマーだったのか？それならばこいつの妙に高いプレイヤースキルにも納得がいく。その割に…うん、少々アレな部分が目立つのだが。
「すごいな、この辺りのクソゲー分かるなんて」
「そんなことないですよ。ランキングとかも中の上ぐらいが精一杯で」

「いやそれでも十分すごいから。危牧のあの極悪な災獣共はなかなか対処できないからな」
「できても中型までですからね。超大型相手はどうしても無理です！」
お、おお、なんというか、猛烈に感動している。クソゲーに関して、カッツォには俺が教えることばかりだし、ペンシルゴンは俺がやってるクソゲーに理解を示さないことも多い、幕末とか。尊敬している武田氏についても、リアルで交流を持っているわけではない。
そうしてみると、初対面とはいえリアルで対等にクソゲーについて話せるというこの状況は、経験してみると結構楽しい。学校とかでも趣味についてはほとんど話してこなかったし。
そう思っていたのは俺だけじゃなかったのか、隠岐のテンションも上がっている。それを見れば俺のテンションもつられてさらに上がるわけで…

「お兄ちゃんと紅音、すごく仲が良さそうね。ゲームの趣味も同じみたいだし…」
「へぇー」
クソゲートークに夢中になってて、後ろでどこか面白そうに呟く瑠美が何を言っていたのか気付かないままだった。

ワゴンに行くのは理由がある

■

夏休み明け初日、ホームルームが終わり下校となった頃。俺はある思いを抱えていた。

そう、クソゲーをやりたいと。

昨日の隠岐とのクソゲートークで、ああそういえば最近クソゲーやってないなというのを再認識してしまった。シャンフロ、ＧＨＣ、ネフホロ。いずれも神ゲー、及び良ゲーに分類されるものだ。まあネフホロは過疎っているという前提が付くが、ゲーム自体は面白いしな。

そして最後にやったクソゲーはフェアクソ…いやウェザエモン戦の前にちょっとやった便秘だったか？　とにかく、あれ以来クソゲーをやってない。クソゲーマーは定期的にクソゲニウムを摂取しないと死んでしまうとは誰の言葉だったか。今の俺がその状態だ。

ただクソゲーをやるだけなら問題はない、それこそ部屋にズラリと並んでるからな。だがしかし…

「どうしたものか…」

「珍しい、なに悩んでるんだ？」

「雑ピか、いや少しな。分かりやすくいうとこう、ラーメンを食いたいが出来れば今まで言ったことのない店のラーメンが食いたい、みたいな」

「あーあるよなそういうとき。で、結局何の話？」

「今ので理解できなかったのか。もっと想像力を鍛えないといい作品は生まれないぞ？」

「いやただの例え話で理解しろとか無理じゃん！ていうか何の話!?」

「お前が授業中書いてるノートの中身」

「え、嘘、なんで知って…すいませんこれで勘弁してください」

ブツは受け取っておくが、この先も黙っているとは言っていない。いざとなったらこいつがポエム書いてることを盛大にぶちまけよう。

さて、実際どうしたもんか。とりあえず岩巻さんに聞くか。最近ロックロールに顔出してなかったし、もしかしたら新作が入荷しているかもしれない。いやまて、今回のきっかけである隠岐から聞くというのもありじゃないか？隠岐は厳密にはクソゲーマーではなく、小遣いがなかったからワゴンゲーを買っていた。ワゴンゲー＝クソゲーというわけではないが、何かしらの理由があるからこそワゴンゲーとなるのだ。それに隠岐と俺の好むゲームジャンルは割と被っている。あいつがおすすめするゲームなら俺も楽しめるゲームなのではないか？

「よし、そうと決まれば行動あるのみ」

というわけで現在ロックロール。

「こんにちは岩巻さん、とりあえずクソゲーを一本」

「はいこんにちは。ひどい挨拶してるって自覚してる？そんな常連感だしてもないものはないよ」

くっ、こちらは空振りか。まあ岩巻さんとてすべてのクソゲーを完璧に把握しているわけではないだろう。となれば隠岐の薦めるゲームに期待するしかない。今日は休み明け初日で部活もなかったらしく、ロックロールに来て直接選んでくれるという。そこまでやってくれると逆に申し訳なく思えてくるが、ここは素直に乗っかっておこう。

「ひとまず隠岐の奴を待つか…」

「あれ、陽務君紅音ちゃんと知り合い？」

「あーはい、シャンフロで知り合ったんですけど実は妹の友人だったらしくて。岩巻さんもあいつの名前知ってるんですね」

「まあ、彼女はある意味不良在庫を買って行ってくれる天使みたいな子だからね。…しかし知り合いだったんだ。ふうん、そう……」

「…あの、何か問題でもあったんですか？」

「へ？　いや何もないよ。ただちょおっとね、もしかしたら相性的に良すぎるんじゃないかと乙女ゲーマーとしての勘が告げているというか。噛み合わなければお互い我が道突っ走りそうなんだけど…」
「えーと、さっきから何の話を…」
「こんにちは！岩巻さんお久しぶりです！　あ、楽郎さんも先に来てたんですね！」
　と、ここで隠岐がやって来た。返信が来てからそんなに経ってないし急いできてくれたのかな？　そうだとしたら少し悪い気がする。
　岩巻さんも我に返ったようで、いつも通りの様子で隠岐を迎える。
「あーうん、紅音ちゃんこんにちは。陽務君から聞いたよ、実は知り合いだったんだってね」
「はい、私も昨日知ってびっくりしました！あ、ゲーム見させてもらってもいいですか？」
「いいよー。いつも通りワゴン？」
「はい！　楽郎さん、いつもこの中から選んでいるんですけどいいですか？」
「ああ、頼む。隠岐のお薦めがあればそれを選んでくれ」
「責任重大ですね！わかりました！」
　そういってワゴンにあるゲームを真剣に眺め始める。もうちょっと気を抜いてくれてもいいんだが、真剣に選んでくれているというのが嬉しいという気持ちもある。…うーん。
「どういうこと？　もしかして紅音ちゃんに見繕ってもらってるの？」
「ええまあ。昨日話した限りやってるゲーム被ってたから、隠岐のお薦めは信用できるんじゃないかと思って」
「あー、確かに便秘とか危牧とかやってるね。あんないい子なのにクソゲーばっかりやる羽目になって…。それに比べてこっちの子はゲロの中に喜んで突っ込んでいくし…」
　世の中にはいろいろな生き方があるのです、仕方ないことなんですよ。
　しかし金の問題はどこまで行ってもついてまわるということだな。

やはり武田氏から推薦されたプランを実践するのが一番正しいルート…！

「あ、これ！楽郎さん、これなんかどうでしょうか!?」
「どれどれ。…ラインズ・ソルジャー？」
「あーなるほど、そういえばそれは陽務君買ってなかったかな」
　パッケージにでかでかと兵士らしき男の背中が載っているゲームソフトを眺めていると、岩巻さんが納得したかのように頷く。この反応、アタリとみていいようだな。
「岩巻さんのその様子からしてクソゲーですよね。どんなゲームなんですか？」
「んーそうだねー。ちょっと癖のあるアクションゲームってところかな。君がやった中だと…ネフホロが近いかな。ロボゲーじゃないしあそこまで複雑って訳じゃないけど、操作に慣れずに挫折した人が多いって聞くかしら」
　そうなるとクソゲーというより過疎ゲーが近いのか？どうする、個人的にはもっとエグくくる感じのクソ要素が欲しいんだが…
　しかし、どうやら岩巻さんには俺の考えはお見通しだったらしい。ニヤリと笑いながらそのゲームについての話を続ける。
「心配しなくても大丈夫だよ。ネフホロの操作性はリアルの適性を追求してしまったが故のもので、アクティブなプレイヤー達からはきちんと受け入れられたもの。それ以外の要素にクソゲーの原因もないしね。
　一方でこっちは、あんまり詳しいこと言うとネタバレになっちゃうけど、まあ結構な理不尽を要求されてるんだよね。評価するべき箇所もあるっちゃあるけど、それ以上に批判される部分も多い。やりこんでいる人たちからもクソゲー認定してる人多いらしいし、君も満足できると思うよ」
　ふむ、そういうことならやってみるか。金額を聞き購入手続き…やっぱワゴンゲーだけあって安いな。

「あの、楽郎さん。少しいいですか？」
「ん、どうした？」
「えと、そのゲーム、二人プレイのモードがあるんですけど…その、一緒にやってもいいですか!?」
「このゲームをか？でも隠岐は一度クリアしてるんだろ？」
「二人プレイだと敵の数が増えたり配置が換わったりなんかして、難易度が上がるみたいなんですけど、私そちらではやったことないんです。あとセーブデータも複数作れるので、初期状態でまたプレイし直せますし。
　それにその、今までリアルで一緒にゲームをする友達がいなくて、ゲーム上の知り合いしかいなかったから。だから、友達というと失礼かもしれないですけど、リアルで知り合うことが出来た楽郎さんと同じゲームを一緒にやりたいと思ったんです。…だめ、ですか？」
　うーん、既にクリアした人と一緒にやるとなると寄生プレイになるからあんまりしたくないんだが…初プレイのクソゲーを高難易度でプレイ、というのはありだな。あちらも初期状態らしいし、完全な寄生って訳でもないか。というか、純粋な善意でゲームを薦めてくれた隠岐の誘いを断るというのも、流石に気が引ける。
「いいよ、一緒にやるか。…ログインする時間を合わせる必要があるな。希望はある？」
「あ、ありがとうございます！　時間は…えと、二〇時からでどうですか？」
「こっちもそれでいいよ。はじめてすぐ合流できるのか？」
「大丈夫です！始めたらインターミッションエリアに飛ばされるのでそこで待っててください！私が楽郎さんを探します！あ、楽郎さんのＰＮはこのゲームでもサンラクにします？」
「ゲームは基本それで統一してるからな、これもそうするつもり」
「わかりました！」
　二〇時からならそれまでに勉強やら風呂やら済ましておくか。隠岐の感じからして夜中までやることはないだろうし、シャンフロは深夜帯にプレイしよう。

さて、新しいクソゲー、存分に楽しませてもらおうか。

◇

「…うーん、思った以上に相性良さそうだったわね」
「これ、玲ちゃんきついかもしれない…」

センジョウノヘイシ

■

「思ってたよりも過疎ってないな」

午後八時、時間となったのでログインしたが、それなりの人を見掛ける。ネフホロに似ていると聞いていたから勝手に過疎ゲーかと思っていたが、そういうわけでもないのか。まあ人気のゲームと比べると間違いなく少ないのだが。

「さて、隠岐がこっちを探すって言ってたが…」

ＰＮはプレイヤーの上に表示されているから探せなくもないが、人がいるなら少し時間がかかるか？なんて思っていたら後ろから声をかけられた。

「サンラクさん、お待たせしました！」

「おう、来た、か…」

そこにいたのはひげを蓄えた筋肉隆々の大男。名前はアダーフライ。たしかドラゴンフライとは別の海外における蜻蛉の意味だったか。今回も蜻蛉に関連したＰＮなんだな…。いやそれよりもそのアバターだよ、なんで便秘の時といいまたそんなチョイスなの？クターニッドの性転換も脂ぎったおっさんだったし…。もういいや、突っ込むのはやめておこう。

「で、これからどうすればいいんだ？」

「そうですね、まずは―」

第一異界・獣王平原。アフリカのサバンナによく似たこのステージはご大層にもそう呼ばれているらしいが、とりあえずステージ開始だ。チュートリアルも何もなかったからいろいろとぶっつけ本番と

なるわけだが…
「ひとまず聞きたいんだが、開始前のＳＰやらＷＰとかってのは何だ？」
「ＳＰはスキルポイント、ＷＰはウェポンポイントですね。ステージごとに設定された数値までのスキルと武器を持ち込むことができます！」
「武器やスキルを増やす方法は？」
「基本はステージクリアの報酬です。後はクリア時に特定の行動をとっていたり、ステージ内でイベントを起こした時なんかでしょうか。あ、武器に関してはＷＰに余裕があると拾った武器をそのまま入手できます！なければそのステージ限りでしか使えないんですけど…」
　初期スキルであるハイダッシュと武器のコンバットナイフを確認。武器がこれ一つというのも心許ない。ステージ中に拾えるといいんだが、ステージがサバンナである以上まともな武器が拾えるかどうか微妙だな。
「それからすいません、二人プレイだとストーリーがなかったみたいで…」
「まあそういうゲームもあるし仕方ない。いつか一人プレイするときにでも確認するさ。…聞いてばっかりじゃ始まらないし後は実践で覚えるか。とりあえずこれだけは覚えておけってのはあるか？」
「あ、そうでした！一番重要なことを言ってませんでした！」
　おい、本当に大丈夫か？なんかまた後でも言い忘れてたとか言いそうで凄い不安なんだが？
　そんな俺の不安は、アダーフライの次の発言でかき消された。
「えとですね、このゲームでは横移動をしようとするとペナルティーを受けます！」

「は？」
　横移動するとペナルティー？なんだそれ。
「プレイヤーが行動できるのは指定されている直線の上だけなんです。直線上の範囲にいるなら地面から離れていても問題ないんですけど、そこから外に出ようとすると転けちゃって、５秒くらい動けなくなるんです」
　目をこらしてみると地面に薄らと線が見える、それも２つ。その間がプレイヤーの行動範囲という訳か。かなり狭いぞこれ、ぎりぎりまで詰めて人が二人通れるかどうかだ。というか移動範囲少ない割に背景めっちゃこってるな。そこにリソース割くより他の要素増やした方がいいんじゃないか？
「これ、攻撃の時とかどうなるんだ？腕振り上げたら簡単にはみ出るぞ」
「そういったものはカウントされないみたいです。線に対して体が…垂直？になっても大丈夫なくらいです」
　横に移動する意思を見せたときだけ反応するってことか？いまいち分からんが、今は敵の姿もない。試してみるのもありか？
「ペナルティーを受けることで起きるデメリットはさっき言ってたこと以外にあるか？」
「いえ、特にないですよ？」
「そうか、それなら……う〝ぁ」
　なんかめちゃめちゃな勢いで投げ飛ばされた感覚を受けながら、体が強制的にダウンさせられる。これ結構きついな！
　そのまま５秒経過し、ようやく動けるようになったが…なるほど。
「これが岩巻さんの言ってたことか」
　しかし体験してはみたが、何というか地味だな。ネフホロと似てるって言うからどんなものかと思ったが、これならなんとかなりそうな気がする。要は横移動しなければいいだけ…いや結構きついのか？うーんわからん。
「まあやってくうちに分かるか、ひとまず進めよう。とりあえずアダーフライが前を歩いてくれ、俺じゃまだ分からんことも多いから

な」
「わかりました！」

そんな感じで始まったが、すごいのどかというか、ゆったりしてるというか。少なくともクソゲーをやってるという感じがない。うーん、正直期待外れみたいな…。
つーか背景ホントなんでこんなこってるんだ？かなり遠くの鳥まできっちり見えるぞ。お、近くにシマウマやヌーの群れまで発見。実際のサバンナもこんな風景が見えるのか？そういった意味ではサバンナ体験みたいな…あれ？なんか群れが急に動き出して…
「アレ!?サンラクさん、チーターの群れです！」
「は!?チーターの群れ!?いやおかしいだろ、チーターは基本単独行動だったはずだぞ！それがなんで群れで行動してるの!?つーかチーターはシマウマ襲わないし！」
「サンラクさん詳しいですね!?」
ゴリライオンやってたときにいろいろ調べてたからな。ってそうじゃない！やつら狙いを変えてこっちのラインに入ってきやがった！
正面から速度を落とすことなくチーターが突っ込んでくる。アダーフライがナイフを構え迎え撃つが、群れのうち数体が異常な跳躍力で飛び越えて俺に向かってくる。くそ、とりあえず回避……あっ
『えとですね、このゲームでは横移動をしようとするとペナルティーを受けます！』
ああ、そうか、こういうことか。うん、確かにこれは…
「サンラクさん!?」
次の瞬間、盛大にすっころんだ俺にチーターの爪が突き立てられ…

「大丈夫ですかサンラクさん!?」
「まあゲームだから痛みはないよ。しかしこれは…」
リスポーンしてスタート地点に戻ってきた俺に、同じように戻ってきたアダーフライが声をかける。どうやら一人死ぬともう一人も強制的に戻されるみたいだな。しかし…前言撤回だ、認識が甘かったとしか言い様がない。なにが横移動できないだけだ、はっきり言って死活問題だ。
横回避なんてゲームをやる人なら…いやリアルであっても普通にやること。それがとっさの判断であるなら尚更だ。真っ正面から向かってくる車をどう避けるか?そんなもん横に避けるに決まってる。
そしてこのゲームの作り込まれた背景。こいつがこの問題をさらに悪化させている。人は視覚によって情報の８割から９割近くを得ている。もし真横にあるのが壁であり、それが目に見えているのであれば、例え咄嗟の判断になろうとも横に避けようなんて思わない。だがこのゲームはの背景はシャンフロなどの例外を除けばＶＲの中でもかなり高水準なもの。その結果があれだ。
しかし、実際どうする?無策のまま挑んでも、さっきの二の舞になる気がする。この際アダーフライから聞くか?いやでもクリアした人間から簡単なアドバイスはもらっても攻略法まで聞くのは正直したくない。だがしかし…
「サンラクさん、もしよかったらリプレイでも見ますか?このゲームリプレイモードも付いてるんです!」
リプレイか、速攻で死んだリプレイ見るのもあれだが、今は少しでもヒントが欲しい。
えーと、メニューを開いてリプレイモード起動っと……うぇ!?
瞬間、大画面ＴＶのある部屋に転送されていた。隣にはアダーフライもいる。なんだこれ。

するとＴＶの電源が付き、そこに映っていたのは…
「映りました！やっぱりこうしてみると新鮮ですね！」
画面の左から右方向に向かって移動する俺とアダーフライ。おい、まさかこれ…横スクロール？

上映が終わり、リプレイモードが終了。そのまま再びスタート地点に戻る。時間は短かったが、得られた情報はかなり大きい。
まず一つ、このゲームの制作者はいろんな意味でアホだ。おそらく往年の横スクロールゲームをＶＲでも再現したいとか、そういう理由でこんなゲームを作ったんだろう。でなければまっすぐにしか進めないだとか、リプレイモードが横視点なんかの妙な要素は出てこない。
そしてこのゲームが横スクロールを再現したものであるならば、覚えゲーや死にゲーの類いとなってる可能性が高い。つまり、このゲームの最も簡単な攻略法は、トライアンドエラーを繰り返し情報を集め、どこでどのような行動をとるべきか把握することだ。事前に何をすればいいか分かりさえすれば、横移動に頼る以外の方法を予め準備することが可能なわけで。隠岐はＲＴＡ型のプレイスタイルだし、このゲームもそういった方法でクリアしたのだろう。
こうなると、アダーフライが持つステージの情報価値はかなり薄くなったことになる。二人プレイだといろいろと変わるみたいだし、チャートが崩れてるなら最初からやり直しみたいなもんだ。元から聞くつもりもなかったけど。
さて、攻略法としてパターンを把握することが上がったわけだが、パターンを覚えたからと言って油断すれば、このゲームの性質上間違いなく死ぬ。そもそも、検証やらで死ぬならともかく、トライアンドエラーで何度も死ぬこと前提のプレイって言うのも癪だ。だから、俺はこの方法をとるつもりはない。

「アダーフライが攻略したときって、トライアンドエラーでひたすら死にまくってたか？」
「あ、はい！すごいですね、どうしてわかったんですか!?」
「お前のプレイスタイルとこのゲームの性質を考えればな。ひとつ言っておくけど、今回のプレイでその方法は使わない。あんまり何度も死ぬつもりはないからな」
「わかりました！でもどうするんです？」
「このゲーム、周りの風景がかなり作り込まれてるからな。これ、多分だけど横移動を誘発する以外に、初見殺しに対応するためのヒントになってると思う。アダーフライがクリアしたときにも何が起きるかの目印になってたんじゃないか？」
「あ、はいそうです！ただ、さっきのチーターの群れは分かりませんでした…」
「やっぱ二人プレイだと違うってことだな。だがさっきはシマウマやヌーの群れがいた。これがヒントになってて、それから推測して対策しておかなければいけなかったんだ。
　だからこそ、とにかく初見殺し対策のヒントを探し、それを元に即興のチャートを立ててクリアする。今回のプレイは全編それで通す」
　もしかしたらさっきの群れがたまたまヒントになってただけで、今後初見殺しが連発する、ということもあるかもしれない。だが、覚えゲーは何かと批判を受けることも多い、今のご時世なら尚更だ。ＶＲで横スクロールを作ろうとする人間が、それを分かっていないとも思えない。
　だからこそこのゲーム、ノーミスでクリアする為の方法もあるはず。そう信じていくしかない。
「アダーフライ、お前がオフェンスだ。俺は基本後ろで攻略の糸口を探し、お前にそれを伝えながら対策を練る」
「私が前ですか!?でも、元々はサンラクさんがお薦めのゲームをやりたいってことだったのに…」
「一度クリアしたことがあると言っても今持ってる情報が役に立たないなら、俺の方がそういうのを探すのは向いてるだろうし。むしろ、

お前は前を向いて突っ走る方が性に合ってるだろ。
　そもそも二人プレイで誰がどういう役割を担ってようが、攻略できた時点で二人の勝ちなんだ。気にすることはないよ」
「サンラクさん…」
「ま、お前は全力で突き進め。俺はそれをサポートしながら…全力でついて行ってやるよ」
「……」
　いかん、なんか方針固まったらテンション上がってこっぱずかしいこと言った気がする。いや言ったな、アダーフライも呆然としてこっち見てるし。ひ、ひとまずなんかごまかせ！
「と、とりあえず行くぞ！最初のステージなのに全然進んでないしな！」
「あ、は、はい！」

傍から見ればアレ

とあるステージのリプレイ（一部抜粋）

「ここが第四ステージか。死霊跡地で夜の墓場…アンデッド系の敵がメインか？」
「あ、あれ？私がやったときと違う？」
「？今までも違うことばっかりだったんだろ？」
「そうなんですけど、このステージ、確か夕暮れだったと思うんです。こんな風に真夜中じゃなかったはずです！」
「もしかしてステージそのものが違うってことか？このステージが特別？それとも何かのフラグ踏んだ…？」
「こ、こういう雰囲気は苦手です。私、肝試しやお化け屋敷とかも駄目で…」
「え、マジ？それなら俺がひとまず前に…って」
「「「グゥゥゥァァァァァァァァァァァァ」」」
「きゃあああああああああああああ！」

「きゃあああああああああああああ！」
「うぉぉぉぉい、びびってないでお前も手伝えええええ！」
「す、すいませんサンラクさ「グゥゥァァァァァァァァァ！」いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
「言ってるそばから！あーくそ、これ難易度おかしいだろちくしょおおおおおお！」

「だぁーもう、これ以上は無理！流石に敵の数多過ぎだろ！」
「サ、サンラクさんすいませんでした！私も戦います！」
「やっとまともに動けるようになったか！頼むぞ、こっから巻き返す

！」
「はいっ！…大丈夫、大丈夫、こわくないこわくない…！」
「おいホントに大丈夫だろうな!?すごい不安になったぞ!?」
「い、いきます！やぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

■

日曜日、ランニングシューズを履き外へ出る。ＶＲゲームを楽しむのであれば、必要最低限の運動は行うべきだ。体調を崩すことがあればゲームを楽しむどころじゃないからな、健康管理には気を遣う。徹夜？睡眠不足？そんなもんエナドリで何とかなる。カフェインの神様を信じろ…！

準備運動をしてそのままスタート。走りながら今やってる二つのゲームについて考えをまとめる。

まずはシャンフロ。黒狼とのいざこざもようやく終わり、一区切り付いた感じだ。まあ聖女ちゃんの依頼などのやることも多くあるが、めんどくさい状況が一つ片付いたことには素直に喜ぼう。外道達はともかく、秋津茜やルスト、モルド達にも気をつけるように言ってあったからな。これであいつらも気兼ねなく行動できるだろう。ルスモル達はネフホロメインだからログイン率は低いだろうけど。

次にラインズ・ソルジャー。ようやく第四ステージクリアまでこぎつけることが出来た。第四ステージの最初はアダーフライが怖がって戦力にならず、一人で突っ込む羽目になった為もう駄目かと思ったが…びびりながらも支援に回ってくれたアダーフライのおかげで何とかなった。あれが体育会系の根性と言うべきものだろうか？何はともあれ折り返し地点。最初と比べゲームに対する慣れや理解も進んだことだし、攻略速度も上がってる。残りのステージもこの調子でいければいいのだが…。

というか、考えてみれば２つとも隠岐と一緒にやってるゲームなん

だな。シャンフロはクランが同じだけで普段からパーティ組んでるわけでもないが、リュカオーンやクターニッドのユニークシナリオは一緒にクリアしたし、ラビッツユニークも発生させているから会う頻度はなんだかんだ多い。ラインズ・ソルジャーではここ最近毎日一緒に二人プレイで攻略してるし、リアルでも知り合いときてる。しかも瑠美の友人なわけで、ここまで来ると何か縁を感じたりもする。その理屈で行くとカッツォとペンシルゴンもそうなんだが…あいつらの場合は、縁は縁でも腐れ縁とかだな…

「あれ、楽郎さんじゃないですか？こんにちは！」

「うお、お、隠岐か!?」

「え、あの、どうされたんですか？」

「いや、何でもないぞ、うん」

「？」

びっくりした、丁度隠岐のことを考えてたときに出てくるもんだから何事かと思ったわ。

隠岐を見てみれば、俺と似たようなジャージ姿。この格好から察するに…

「隠岐も運動か？」

「はい、今日は日曜日で部活もないのでジョギングしてました！楽郎さんもですか？」

「おお、まあな。ＶＲゲームを嗜む以上は健康な体を維持すべきだからな」

「そうですねっ、体は大切です！思いっきり動くのも気持ちいいですし！あ、そうだ！楽郎さん、どうせなら一緒に走りませんか!?」

「別にいいけど、俺そこまで早くないぞ？それこそ運動部の隠岐からすればかなり遅いペースになるだろうし」

「大丈夫ですよ、私もそれほど早いペースで走ってないですし。それに、一人で走るよりも、楽郎さんと一緒に二人で走った方が楽しいと思うんです！」

「…お、おう、そうか。じゃあ一緒に走るか」

「はいっ！」

こ、こいつは自然にこういうこと言ってくるな。一緒にゲームやってるときも思ったが、どういう育ち方をしたらこうも純粋に育つんだ？

そんなわけで並んで走っているわけだが…やっぱこいつはえぇ…！正直ついて行くだけで息が上がり始めているが、隠岐の方をチラと見てみると平然そうに見える。やはりリアルの体にはどうしようもない格差があるのか…！

しかしな、だからといってヘタレるつもりもないんだよ。こっちはゲームだと結構上からっぽい発言してるし、さっき速いペースで走ってないと言った隠岐のこのペースについて行けないというのも癪だ。イニシアチブは俺がとる…！

「あっ」

ははははよっしゃあ俺が前に出たぞ、どうだまだ走れる…っておい、そんな平然と抜かすんじゃない。く、そっちがその気なら食らいついてやるよ！

「楽郎さんまだまだ行けそうですね！それじゃあペース上げましょう！」

え、嘘、まだ上がるの？流石にこれ以上あげるの無理なんだけど。あ、手引っ張るんだ、なんつーか柔らかい…いやそうじゃない、ちょっと待て、待ってください、これ以上は――！

□

「ぜぇー、はぁー…」

「す、すいません楽郎さん！ちょっとその、嬉しくなっちゃって…ごめんなさいっ！」

ひとしきり走り辿り着いた公園で息を整える。やってしまったと、

後悔で胸がいっぱいになる。抜かれたことをちょっと悔しくも思い、だけど全力なその姿勢を嬉しくも思い…。とはいえ、それが楽郎さんに強要していい理由になるわけじゃない。
「気にしなくて、いい…。俺もまあ、見栄、張ったしな…」
「でも…」
「そこまで気にするなら、そうだな…。次のステージでは、今回のこと帳消しにするくらい、活躍してくれ…」
「あ…。は、はいっ！」
そんな私を、笑って許してくれる楽郎さん。正直、自分ではまだ後悔の念が残っているが、これ以上はきっと楽郎さんを困らせる。だから楽郎さんの言うとおり、次のステージ…第五異界で挽回しようと心に決める。
そう考えて、ふと思い至るのはラインズ・ソルジャーにおけるサンラクさんの挙動。最初のうちはサンラクさん何回か横移動しようとして死んでいたけれど、すぐにそんなことはなくなって…。今では前を走る私に的確に指示を与えながら、自身も積極的に攻撃を仕掛けている。自分も含めて多くの人が、このゲームに慣れるまで相当回数死んでいるのに。
それはもちろん、何が起きるかというのを正確に予測できた部分もあったのだろうが、きっとそれだけでもない。そう思ってサンラクさんに聞いてみたら「リアルに適性が必要なロボやらゴリラやら犬やら虫やら、普通じゃない挙動を経験していたのもあるかもな…」なんてどこか遠い目をしながら言っていた。どういうことなのかいまいち分からなかったけど、それでもたくさんの経験や努力を積み重ねた結果というのは想像できた。
そう、努力。ゲーム中敵がいないときなどはサンラクさんといろいろなことを話すけど、この人は本当にゲームが好きで、そのための努力を惜しまない人だとわかった。聞けば将来もゲームを満喫するために、学校の勉強も普段から怠らず、進学先も知り合いの人に相談に乗ってもらいながら既に決めてあるらしい。出会ったときから尊敬する先達であったけど、その念は日を追うごとに強くなってる。

そこまで考えた後、紅音は思う。どうして楽郎さんは―。
だがその考えは、楽郎の発言によりかき消された。
「…それにしても、第四ステージはすごかったな、ある意味」
「…うぅ。あれ、すごく怖かったです。私がやったときはあんなじゃなかったのに…」
「いやまあ、ゲームの変わりっぷりもそうだけどな。隠岐の悲鳴とかもすごかったぞ。なんというか、すごい女の子らしい悲鳴だったというか」
「ら、楽郎さん！私も女の子なんですよ!?」
「いやそうなんだがな。あのおっさんアバターでアレは卑怯だぞ、最早ギャグにしか見えなかった」
「ひ、ひどいです！そんなこと言うなんて！」
「実際被害被ったからなぁ、ほとんど一人で戦う羽目になったし。また悲鳴を上げることになっても、出来るだけ声は押さえてくれよ？」
「うぅー！」

◇

「…てわけでね、ひどいんだよ瑠美ちゃん！」
「あーうん、わかったわよ紅音」
昼休み、私は紅音と机を会わせてお弁当を食べている、のだが。今私の目の前にいる紅音はどうやら普段とはひと味違う状態のようで。うん、端的に言えば…惚気られているといってもいい。
いや、ゲームではともかく家で初めて会っていたときの様子を見るに、この二人相性良さそうだな、とは思った。あのお兄ちゃんがゲームの話題とはいえあんなに楽しそうに女子としゃべる姿は見たことがなかったし、このゲーム脳について行ける女性が今後どれだけ現れるかと不安にも思った。紅音にしても、いろいろと危なっかしいから悪い男にだまされたらと不安になるし。それこそ気が早いけど、もし

紅音が私の義姉になるようなことがあればそれはそれで楽しそうだなとかいろいろ考えた。
だから始業式の日、お兄ちゃんから連絡が来て「ロックロールに行くから先帰るね！」と言い去って行った紅音を見て嬉しく思ったけど…正直想像以上だったわね。ここ数日、紅音がお兄ちゃんについて話すことが段々増えてきてる。付き合いはじめた、もしくは異性として意識してるんならまだ良かったけどね。
傍から見ているとすっごいモヤモヤすると言うか…。あ、一人教室から出て行った。まあバレンタインにお互い潰し合って何も出来てない男子達にはかなりきついだろうなあ。
「でも、一緒にゲームやってること自体は楽しいんでしょ？」
「うん！楽郎さん、いつも全力で楽しんでいるっていうのが伝わってきて、私も楽しくなるし、私ももっと頑張ろうって気になるんだよ！」
「そうなんだ。……ねえ紅音」
「どうしたの瑠美ちゃん？」
「……。ううん、なんでもない。一緒にゲームできる人が出来て良かったね」
「うん！」
お兄ちゃんのことをどう思っているかって聞いても、たぶんさっきと同じような答えが返ってくる。だから、もう少し踏み込んだ聞き方をしようかと思ったけど、やっぱりやめた。余計なことを言っても混乱させるだけのような気がしたし、それに…すごく幸せそうな紅音を見たら、それが恋慕でも尊敬でもかまわない気がしたから。

ゲームクリア、後に疑問

■

最終ステージ・深淵。これまでのステージの総決算とでも言うべき敵やギミックをくぐり抜け辿り着いたラスボスである邪神・ヴィラルディアは、第一形態ではただの羽が生えた男だったが第二形態となった今では真っ黒なドラゴンへと姿を変えた。

ストーリーこそ結局分からずじまいだったが、ここに至るまでのボスラッシュに加え、このいかにも最終決戦と言った雰囲気はテンションを上げてくれる。それは神ゲーだろうがクソゲーだろうが変わらない、さっさと倒してエンディングを迎えさせてもらう！

『――――――――――――』

「どうしたどうしたァ、その程度じゃ落ちやしねえぞ！」

空中を駆け回りつつ両手に掲げる二刀を振り下ろし、攻撃の兆候が見られ次第即座に離脱。今大事なのは奴のヘイトが俺から逸れない程度にダメージを与えることだ、無理に攻撃を仕掛ける必要はない。

空中で前転、もしくは後転するたびにもう一度ジャンプが可能になるスキル【ロールスカイ】。予備動作がやや面倒な上に三半規管にダメージを受けるという欠点を持つが、それさえクリアすれば何度でも空中をジャンプできる優秀なスキルだ。これに、ジャンプするたびに空中でのダッシュが可能となるスキル【エアダッシュ】、滞空時間の延長と空中における姿勢制御に補正がかかる武器【空刃シルフィア】、横移動ペナルティの対策としてエリア外の色が変化して見えるスキル【エリアサイト】を組み合わせて使用。擬似的にではあるが高速で空中を移動することが可能となった結果がこれだ。

前のステージでシルフィア手に入ったのは僥倖だったな。Ｚ軸の移動が出来ずともＸ軸とＹ軸を自由に移動できるこのコンボの存在はかなり大きい。何せ道幅が狭すぎて前衛二人とかやりたくてもや

れなかったからな。だが今ならそれが出来る、空中から全体を見渡しながらっていうメリットまでつけてな！
「枠外からのレーザーが見えた！おそらく１０秒後にくるから回避に専念！」
「はい！」
　地上にいたらもう少し把握が遅れていたであろう攻撃を難なく回避。ここまでの戦闘から推測すれば、少しの間敵の支援攻撃はない。体力も大きく削れているし、仕掛けるなら今がチャンスなんだが…
「アダーフライ、チャージはどうだ!?」
「もう少しでっ……！、今溜まりました！いつでも行けます！」
「よし、ならこれで決めるぞ！」
「わかりました！」
　右手に持つ【爆刃プロージア】の能力である爆炎球を相手の顔面付近で爆発させ、後方に全速で後退する。ラスボス故にダメージは大して入ってないが、それでもひるませるには十分だ。
『――――――――――――！』
　何やら敵意丸出しにしながら吠えているが…残念だったな。このゲームを始めたとき最初に決めたとおり、俺はあくまでサポート、本命はあっちなんだよ！

【覇刃グランカイゼル】。その特殊能力の発動のためにステージ開始時から装備し続けなければならず、装備中も敵に対して相当回数の攻撃を行う必要がある。他にもいくつか制約がある上にステージで一度しか発動できない訳だが…まあこの手の武器のお約束、その能力はこのゲームにおいて非常に強力だ。なんせこのゲームの行動範囲は直進方向に進むラインの中だけなんだからな。その範囲全体を埋め尽くす攻撃は避けようがない！
「覇刃奥義・【滅牙裂光刃】！」
　掲げられた剣から膨大なエネルギーの塊が天空へと伸びてゆく。まっすぐに振り下ろされた刃はヴィラルディアへと叩きつけられ、そして…

「っしゃークリアしたぞ！やっぱクソゲーをクリアした瞬間っていうのは格別だな！」
「そうですね！すごくやり遂げたぞーって気分です！」
「おもえばこのゲームの挙動には戸惑ったもんだが、面白い経験が出来たよ。ラスボス戦の空中移動も正直ぶっつけ本番だったけど、試してみたら行けたしな」
「さっきのサンラクさんすごかったです！私だったら酔っちゃってたと思います！」
　まあコーラシアス・ライラックと比べたら三半規管の負担も軽微だったしな。いやあれはあいつの軌道がおかしいだけか、操縦してるの俺だけど。
「アダーフライでもやれば出来ると思うぞ。なにげにプレイヤースキル高いしな」
「ありがとうございます！…でもどのみち、スキル自体を持ってないから試せません…」
「スキルの獲得に条件があるみたいだしな。アダーフライが最初にやったときと比べても結構違いがあるんだろ？」
「はい、一人プレイの時とは武器もスキルもこんなに手に入らなかったです！」
「となると思った以上にやりこみ要素も多いのか…。とはいってもあんまりのめり込みすぎてもシャンフロに支障が出るし、やりこみについてはまた別の機会だな」
　当初の目的であったクソゲニウムの摂取という点はクリアしたしな。それに思ったよりも時間をかけてしまった。今の本命はシャン

フロなわけで、そろそろ本腰を入れていきたい。
ただまあ、アダーフライ…隠岐と一緒にゲームをやるのは楽しかった。純粋なゲームの感想ではないが、今回の共同プレイは非常に満足できるものだった。こいつの総当たりなプレイスタイルは俺の周りにはいなかったし、全力でゲームを楽しむ姿勢にはこちらのテンションも引き上げられる。正直名残惜しくも感じるが、またこういう機会もあるだろう。

「なんにしてもお疲れ。このゲーム教えてくれてありがとな」
「いえ、喜んでいただけて私も嬉しいです！むしろ、私こそ一緒にゲームを遊んでいただいてありがとうございます！」
「いやいや、それ言い出したらこっちも高難易度でプレイできたし、一人プレイとはまた違う楽しみ方が出来たから」
「いえいえ、こっちもサンラクさんの動きを見せてもらってすごく勉強になりましたし！」
「いや……あー、これじゃ切りがないな。とりあえずあれだ、お互い様ってことにしとくか」
「あ、はい、そうですね！」
というか俺までこいつの光属性に巻き込まれてたか？外道共ならお礼を言うどころかそれをネタにマウントとろうとしてくるぞ？
「じゃ、そろそろ落ちるか。隠岐は明日も早いんだろ？」
「はい、部活の朝練があるので！大会のシーズンは過ぎましたけど、練習は欠かせません！」
「そか。まあ無茶しすぎないようにな。じゃあお休み」
「お休みなさい！」

□

ログアウトして、ベッドで横たわっていた体を起こす。時間はもう

すぐ２３時。あんまり遅くなると寝坊しちゃうし、早く寝よう。そう考えてはみるけど、思い浮かんでくるのはさっきまでのこと。

ひとまず、サンラクさんに楽しんでもらえて良かった。一度クリアしたゲームではあったけど、一人でやったときよりも難しくかったし、なによりリアルで知ってる人と一緒にやるゲームはとても楽しかった。ゲームの中での知り合いならいないわけじゃない。シャンフロで知り合った旅狼の人達もとてもいいひと達だ。それでも、実際に顔を知っていて、尊敬してる楽郎さんとするゲームは特別だったと思う。

そこまで考えて、あることに思い至る。もうゲームはクリアしたのだし、サンラクさんもやり込みは別の機会と言っていた。なら、当面の間は楽郎さんと一緒にゲームをやる機会もないということ。シャンフロだって基本的には別行動だし。

「……？あれ？」

どうしてだろう？そのことを考えると、少しさみしいと感じる。確かに一緒にゲームをやれないのは残念だけど、それをさみしいと思うのは…あれ？よくわからなくなってきた。

「こういうときは…うん、思いっきり走ろう！」

ちょっと遅いけど、悩んだままでいてもしょうがない。急いで着替えて、私は街へと駆けだした。

棘が一つずつ抜けていくように

■

「あ、楽郎さんこんにちは！」
「おう、こんにちは。こっちが後ろだったのにすぐ気付かれるとは」
日曜日、いつものようにジョギングをしていると前方に見たことのある後ろ姿を見つけたので声をかけようとしたが、隠岐に先回りされてしまった。背後からの気配感じ取れるとか忍者かよ…あ、シャンフロじゃ忍者だったわ。
「この前楽郎さんと一緒に走ったなぁって考えていたのでもしかしたら、って思ったら本当でした！」
いや背後の気配感じ取った理由にはなってないぞ…。というかこの前のことをあまり思い出されてもこっちとしては恥ずかしいんだが…。
「まあいいや、せっかくだしまた一緒に走るか？」
「はい！」

前回同様に並んで走ることとなったわけだが、まるっきり同じというわけではない。そう、俺はあれ以来リアルでの運動量を以前よりも増やしている！人並み程度には鍛えていたつもりだったが、いくら陸上をやっているとはいえ女子中学生相手にああも情けない姿を見せたとあっては気が済まない。いや別に勝負してるわけじゃないけど、これはそう、気分の問題だ。
リアルはゲームのようにすぐさま成長したりはしないが、それでも効果がないわけじゃない。以前よりも呼吸を保てているし、体もまだまだ動く。
「わ、楽郎さん、前よりも速くなってますね！」
「負けっ放しってのは性分じゃないんでな。せめて食らいつくぐらいはさせてもらうさ……！」

「そうですか！なら私も負けていられません！」
あれ、なんでお前も勝負してる気になってるの!?いや俺の言い方が悪かったか？くそ、かっこつけた言い回ししたくせに、ついていけないんじゃこの前と変わらない。うぉぉ頑張れ俺の心肺機能……！

「ぜぇー、はぁー…」
「えと、大丈夫ですか…？」
「大丈夫…大丈夫…前より余裕あるから…」
実際に呼吸自体はだいぶ上がってるが、それでも以前のような「もう動けない」と言うほどでもない。ただきついこと自体は変わらないな、今後も運動量は増やしていこう。
しかし、隠岐が珍しく落ち込んだ様子で佇んでいる。どうしたんだこいつ？
「その、私…楽郎さんに無理ばかりさせてないですか？」
「ん？なんのこと？」
「この前も、今日も、私が無理に速いペースで走って楽郎さんに大変な思いをさせていますし…。ゲームだって、私がわがまま言って二人プレイにしてもらいました。もしかしたら、楽しんでるのは私だけなんじゃないかって、そう思っちゃって…」
そう言ってまた表情を暗くさせる隠岐。こいつにとって何か重要なことなんだろうかとも思うが…うーん。
「…ばーか」
「あ痛っ!?で、でこぴんですか!?」
「楽しくなかったら適当な理由つけて抜けてるって、フレに呼ばれたんで部屋抜けますね^^、ってな。全部全力でやってるところを見てきたからな、楽しいと思うことはあってもつまらないなんて思ったりはしねーよ。むしろゲームクリアしたとき名残惜しく思ったくらいだ」

「え…。ほ、ほんとですか？」
「嘘ついて何になるんだよ。まああれだ、まっすぐ突っ走る方がお前らしい。こっちも楽しかったんだから、今までみたいな隠岐でいいんだよ」
「あ…ありがとうございます！私も楽郎さんと一緒だと楽しいので、その、嬉しいです！」
……
「あれ？楽郎さん、どうかしました？」
「あ、ああ、なんでもないぞなんでも」
「？」
うーん、これ帰ったら瑠美に聞いておいた方がいいかもしれないな…。あーでもあいつ今日バイトだったな、なら瑠美が帰ってきたらだな。
「あ、その、楽郎さん、一つお願いがあるんですけど」
「お願い？」
「はい！私、日曜日は毎週この時間にジョギングしてるんですけど、その…楽郎さんもいつもこの時間なら、これからも一緒に走りませんか!?」
「あーなるほど。いいぞ、さっきも言ったけどこっちも楽しいからな」
「ありがとうございます！えへへ、来週が楽しみです！」
「まだ気が早いだろ…。まあいいや、そろそろ帰るか」
「はい！楽郎さん、お疲れ様です！…それから、ありがとうございました！」
いやお礼はおかしいだろ。って言っても、元気になったみたいだし、まあいいか。

◇

「なあ瑠美、一つ聞きたいことがあるんだがいいか？」

「お兄ちゃんが私に？どうしたの？もしかしてファッションに目覚めた？」
「いや違うから。基本家の中で完結するからジャージで十分だし」
「うーわ。ちょっと妹として恥ずかしいんだけどそれ。というかうちの家族なんでみんなお洒落に無頓着なの？」
「趣味狂いの一族たる陽務家の一員だからな。己の使命に忠実なんだよ…」
「ちょっとかっこよくいってもお兄ちゃんの服装がダサいことは変わらないんだけどね」
　顔が悪いわけじゃないから、もう少し気遣うことが出来ればモテると思うんだけどなぁ。それこそ、どういうわけか永遠様と知り合いなんだし、もっとご教授を賜ればいいのに。
「で、聞きたいことって？」

「ああ、隠岐のことなんだがな、あいつって学校で男子から人気あるか？」
「えっ!?!?!?!?!?!?」
　ちょっとまって、今お兄ちゃんなんて言った？紅音が？男子から人気あるか？嘘でしょ、ゲーム狂いで恋愛になんてみじんも興味なさそうなこの兄が…!?
「お兄ちゃん大丈夫!?熱とかない!?」
「いやお前がどうした」
　半目になって私を見つめるお兄ちゃん。いけないいけない、あまりにも兄が真人間じみた言動をしたものだから取り乱してしまった。そうだ、冷静にならなければいけない。お兄ちゃんがどういった真意があってこんなことを言い出したのか見極めなくては。
「あーごめん、ちょっと普段のお兄ちゃんからしたらあり得ない言動だったから。それで？どうしてそんなこと言い出したの？」
「お前が普段俺をどう見てるかすごく気になるところだが…まあいいや。

隠岐ってさ、すごい純粋というか、まっすぐすぎるって言うか、圧倒的光属性っていうか、そういうとこがあるだろ？笑うときも邪な心なんて一切感じさせない笑い方するし」
「そうだね、光属性っていうのは聞き慣れないけど、どうやったらあんないい子に育つのかって友達の私から見てもそう思うよ」
「だろ？ただあいつ、俺と接してる様子からして、男子に対して基本的にああいう接し方をしてるんじゃないかと思ってな。下心とかがないのはよく分かってるんだが、アレだと勘違いする男子がいてもおかしくないんじゃないかと思ってな」
「なるほどね、なんだそういうことか」
純粋に心配する気持ちが強そうな感じだなぁ。それはそれで紅音の友人としてはありがたい気遣いなんだけど、ちょっと別の感情を期待しちゃった。
「確かに紅音は男子から人気あるよ。それこそ、バレンタインなんかは裏で男子同士が牽制しあってるし。ただ女子がみんな紅音のこと心配してるから、そういった輩からはきっちりガードしてるよ。紅音だって、どうしても合わないような…あの子が許容できない人に対してはあんまり近づかないし」
「隠岐が許容できない人間っているのか？」
「なんていうのかな。頑張らない人間って言うか、出来るのにそれをしようとしない人が苦手みたい。…いや、人っていうより、怠ける行動そのものに忌避感があるのかな？どうなんだろ？
…とにかく、結論として男子からの人気はあるけど、女子が気を配ってるから大丈夫、ってこと」
「そういうことか。…しかしそうか…」
「どうしたの？何か引っかかることでも？」
「いや、なんでもないぞ。ただ、何というか……駄目だ、説明できん」
あれ、この反応…もしかしてだけど無意識に嫉妬してる？え、そういうことなの？本当に？
「まあいいや、参考になったわ。…っし、聞くこと聞いたし、そろそろシャンフロするか」

「あ、ちょっと待ってお兄ちゃん！」
「ん？」
いや呼び止めてどうするの!?「それってもしかして恋じゃない？」とでもいうつもり？それはそれでありだけど、もう少し見守りたいって気持ちもあるし、そういう気持ちには自分で辿り着いて欲しい。だけどこのままじゃ進展しない可能性もあるし…。
「～～～そうだ、名前っ！」
「は？」
「紅音、お兄ちゃんのこと楽郎さんって言ってるけど、お兄ちゃんは隠岐のままじゃん。名前で呼んであげてもいいんじゃない？あの子はきっといやがらないよ」
「…あーそういやそうだな。でもずっと隠岐って呼んでたし、何というか今更感がないか？特に何かあったわけでもないし」
「いいのそういう細かいことは。とにかく、紅音が拒否しない限り、次から名前で呼ぶこと。いい!?」
「お、おう。どういうわけか分からんがわかった」
そう言いながら兄は部屋を出て行き、私はそれを見送ったところでそっと息を吐く。
この前紅音の話を聞いてたときはなんとなく思っただけ、だったけど…もしかしたら本当に、『そう』なるのかもしれない。『そう』なったら…さて、私はどういう風に二人と接していこうかな？

未来を思う瑠美の顔は、兄が時折言う邪教徒というのに相応しいものであるのと同時に、純粋に家族の幸せを願う妹の表情を浮かべていた。

□

「おぉ、秋津茜殿、起きられたか」
「シークルゥさん、おはようございます！今日も頑張っていきましょ

う！」
「む、機嫌がいいですな。何かあったで御座るか？」
「えへへ、なんでもないですよ？さあいきましょう！」
　シークルゥさんにはこう言ったが、確かに今私は…楽郎さんのようにいえばテンションが高い。それはやっぱり、昼間のことが大きいのだろう。いっぱい迷惑をかけてしまったと思ったけど、楽郎さんはそれを笑って許してくれた。私と一緒にやったゲームやジョギングを楽しかった、そのままの私でいいとまでいってくれて、なんだか心が温かくなる。
　そんなことを思いながらラビッツを歩いていると、丁度思い浮かべていた人がいた。
「よぉーし、なんとなく感覚はつかめた。後はこれをものにするだけだ」
「サンラクさんは相変わらず狂気としか思えないような行動をしますわ…。さっきから何回も壁とぶつかってるのに笑顔でまた実行できる辺りおかしいとしかいえないですわ…」
「ほほぉ、エムル、お前はよっぽどジェットコースター体験会をしたいらしいな？」
「い、いやですわサンラクさん、アレはもう簡便ですわー!?」
　そう言ってサンラクさんは楽しそうにしながら、何か準備を始める。おそらく新しい武器、もしくはスキルを試しているのだろう。エムルちゃんの様子を見るにおそらく相当回数死んでいる、のにもかかわらず、サンラクさんが浮かべているのは笑みだ。
　一体どうして、と思うのと同時に、かつて聞けていなかった疑問がわいてくる。どうしてサンラクさんはあんなにも頑張れるのか。あの偉大な先達は、いつだって全力で物事に取り組んでいる。ゲームそのものも、将来ゲームをするために必要となる運動も勉強も、なにもかもを。ゲームが好きというのはわかる、だけどその先に何を目指すのか、何故そんなに頑張れるのか。サンラクさんを、楽郎さんを知れば知るほど出てくる疑問。これまで聞くことが出来なかったが、今なら聞けるだろうか。そう考えると、足はもう止まらなかった。

「サンラクさん、こんばんは！」
「お、秋津茜か。これから出てくのか？」
「はい！ただその、少しだけお話いいですか？サンラクさんに是非きたいことがあるんです！」
「いいぞ。…ていうか、最近聞きたいこととかばっかだな」
「あ、そういえばそうですね！」
こういう何でもないような会話が嬉しく思えるのはどうしてだろう？疑問がまた出てくるけど、今一番知りたいのはこの人のこと。

「何故そんなに頑張れるんですか？目標もなく頑張れるんですか？」

昼、一緒に走ったときに楽郎さんからもらった励ましの言葉。そして今、恥ずかしそうにしながらも語ってくれたサンラクさんの言葉。
私はきっと、一生忘れない。

最初の一歩を、あなたと一緒に

□

――今の自分にできるのは、せめて過去の自分に誇れるようにいることくらいだろ？

あの時楽郎さんから聞いた言葉が、胸の内から離れない。

過去の自分。楽しそうにグラウンドを駆け回る友達を、ただ見てることしか出来なかった私。

やりたいことがあってもできなくて、それを面倒そうにしてる人をみると悔しくて。

それでも、自分には出来ないと諦めることしか出来ない自分が、嫌いだった。

小学校高学年の頃から体質改善の為に始めた陸上は、気がつけば私の生活の一部となっていた。

それは楽しいことばかりではなかったけど、今では私の欠かせない一部。

あの頃出来なかった挑戦を続けた結果、私の世界は広がって、いろいろな目標が出来た。尊敬する人が出来た。

あの頃の私から見て、今の私は、誇れる自分となっただろうか。

■

日曜日朝方の恒例となった隠岐とのジョギング。今日は既に走り終わり、公園で休憩を取っていた。
「はぁー、はぁー、…あー疲れた」
「お疲れ様です！前よりもまた速くなってましたね！」
ここ最近、毎日走ってきたからな…。ただ、やはりリアルとゲームの格差はなかなか埋められない。前よりも食らいつけるようにはなってきたが、それでもまだ隠岐は余裕を残してるように感じる。うーん流石陸上部。
「なんにしてもまだまだだからな。とりあえず目標は隠岐に遅れないことだ。いずれ全力出させてやるよ…！」
「え、私が目標ですか!?」
「もともとは体力作りでやってたことだけど、こうやって一緒に走るようになったんだし、明確な目標はあった方がやりがいあるからな」
「えへへ、なんだが照れますね。私、いっつも追いかける側だったので、そう言われるとすごくすぐったい気分です」
「全国ベスト8が言っていい言葉じゃないだろ。昔がどうだったかはともかく、今のお前は結果を出したんだ。もっと誇っていいんじゃね？」
「あ……。そう、ですね。私の尊敬する陸上選手も、同じようなことをいってました！ありがとうございます、楽郎さん！」
お礼言われることしてないんだけど…。まあいいや、こいつらしいし。

さて、体も整ったし、そろそろ帰るか……あ。
「そういや忘れてたな…」
「どうしたんですか？」
「いや、ちょっとな…」
瑠美から隠岐のこと名前で呼ぶように、って言われてたんだっけ。瑠美のことだし、明日学校行ったときにでも隠岐に確認するかもしれないな。となると、ここで名前呼びしていいか聞いといた方がいい

か。
「あ、あのさ」
「はい？」
「あー、そのな…」
あれ、なんか続かない。おかしい、隠岐のことを名前で呼ぶだけ、の筈だ。なのにすごく緊張してる。この感じは何なんだ？
隠岐は言葉を詰まらせてる俺を見てキョトンとしている。このままでは埒があかない、さっさと言え！
「…あー、それじゃあそろそろ帰るか……紅音」

□

「はい！お疲れさ……。あ、あれ、楽郎さん、今…」
「ああ、ずっと紅音はずっと楽郎っていってたけど、俺は隠岐のまんまだったからな。ちょっと今更感があるけど、嫌か…？」
「い、いえ、すごく嬉しいです…！是非そう呼んでください！」
楽郎さんから名前を呼ばれた。今までずっと名字で呼ばれてたから、名前で呼んでもらえて嬉しい、んだけれど。どうしてだろう、なんだか顔が熱い気がする！
「あれ、なんか顔赤くね？大丈夫か？」
「やっぱりそうですか!?あ、でも楽郎さんもですよ!?」
「え、マジ？いやでも風邪とかって訳でもないし…運動後だからか？」
名前を呼ばれた、ただそれだけで、どうして。そこまで考えて、ふと、ここ最近楽郎さんのことばかり考えてたことを思い出した。どうしてなのか今まで深く考えなかったけれど、そこに理由があるんじゃないかと思い――――ようやく気付いた。

最初は、尊敬すべき先輩、だった。

別のゲームで再会した時には、一緒に強敵に、しかも立て続けに挑むことになり。

それを乗り越えたときには、尊敬の念はさらに深まっていた。

その後、友人の兄であることを知って。

初めて、リアルで知ってる人と、一緒にゲームをした。

休日には、競い合うように走るようになり。

時には、不安がる私を励ますように。

時には、疑問を投げかける私に、不器用ながらも優しく答えてくれて。

時には、初めて会ったときのような大胆不敵さで、我先にと前に飛び出していき―。

気がつけば、その人のことばかり考えている私がいた。最初は目標としていた人、憧れを抱いていた人。でも今は、それだけじゃない。もっと一緒にいたい、いろんな出来事を、分かち合いたい――――――

――――――

あ、そうか、そうなんだ――――――

「どうしましょう！楽郎さん！」

「ん？」

どうしよう、止まらない。これは自分にとって、ううん、女の子にとって、とても大切なこと。

もしかしたら受け入れてもらえないかもしれない。そう考えると、

すごく怖い。
だけど、止まりたくない。言葉にしなければ、いつまで経ってもこの思いは届かない。
そんなのはいやだ。少しでも長く、この人と一緒にいたい。
だから、伝えるんだ。私の正直な気持ちを、まっすぐな言葉で！

「どうやら、私は楽郎さんのことが好きみたいです！」

■

……
……
……
「……楽郎さん？楽郎さーん？」
「……ハッ!?」
いかん、思考がフリーズしてた。何のはなしだったっけ、思い出せ。えーと、どうやら紅音は、俺のことが好きらしい。うん、まとめるとすごい分かりやすいな。いやそのまんまかハハハ……え、もしかして、告白された？
「その、驚かせてごめんなさい！　でも私、楽郎さんのことが好きで、ずっと一緒にいたいって気付いたら、伝えずにはいられなくて。だから楽郎さん、私と付き合ってください！」
紅音の表情は真剣そのものだ、嘘偽りの類いじゃない。ああいや、こいつはそもそも嘘とかつけないか。
いくらこういったことに縁がない俺でも分かる。茶化すことなく、自分の気持ちを正直に答えなければならない。

だから俺が紅音をどう思っているかを考えてみた――――――――
驚くほど簡単に結論が出たのだが。

「……いいか紅音、前半部分については、とりあえず今は一度しか言わないからよく聞けよ？」
「はい！……前半部分？とりあえず今は？」
ああ、とりあえず今は、だ。正直かなり恥ずかしいが、これから先、多分何度も言うんじゃねえかな、なんて予感がする。

笑ったときの顔がまぶしくて、その…すごくかわいくて。
ちょっと抜けてるというか、発言の数々が少々アレなところも。…告白の返事をする相手にこれはひどいか。
頑張ってる人を応援するくせに、妙に負けず嫌いなところがあることとか。
純粋すぎるからか物欲センサー完全に回避してる…これ褒め言葉か？
いろいろあるけど、なにより、初めて会ったときから変わらない、何事にも全力でまっすぐなところ。

まあ、全部ひっくるめて。

「俺、陽務楽郎は、紅音のことが好きだ!!　だから俺と付き合ってくれー!!」

「あ……は、はい！こちらこそ、よろしくお願いしますっ!!」
そういって、紅音が俺に向かって飛び込んでくる。朝とはいえチラホラ人の姿も見えて正直恥ずかしいが、そんなことよりもこっちの方が大切だ。

さて、これからどうなるんだろうな？いや、考えるまでもないか。少なくともこいつと一緒なら…間違いなく退屈なんてものとは無縁の生活になるだろう。そんなことを想いながら、紅音を抱きしめ返した。

恨むぞ昨日の俺、なぜあんな大胆な告白返しをしたぁ…！いくらテンション上がってたからって、もっとやりようがあっただろっ…！

「よぉ青春少年、これから彼女とデートか？羨ましい限りだな」

「ドラマやアニメ張りの大告白だったんだろ？是非ともその内容を聞かせてくれよ」

まさかアレを聞いてる奴がいるとは。いや朝方とはいえ公園で、あんな大声を上げたんだから、仕方ない面もあるだろうが、なぜピンポイントであいつなんだ！

「いやぁ、まさかあんな場面に出くわすとは思わなかったわ。人生何があるか分からないもんだなぁ陽務？」

「人の告白場面を題材にしたポエムが世間から好評な奴はいうことが違うな雑ピィ…！」

「いや申し訳ないかなとも思ったんだけどな、これは形にして残しておくべきだとも思ったんだよ。録画したわけでも名前を出したわけでもないし、まあ許してくれ」

くそ、完全にマウントとられてるからダメージ全然入らねぇ！なんとか脱出を図りたいがどうする…？

「ていうかさ、校門の前にいるの昨日の子じゃね？」
「は？」
　そういって校門を見ると、瑠美と同じ中学の制服を着た女の子が立っている。うん、紅音だなあれ。確かに部活ないなら一緒に帰るか、とは言ってたがもうきてたのか。ていうか雑ピ、この距離で、ちょっと見ただけの紅音を識別したっていうのか？地味にすごくねこいつ。
「え、どれどれ？……え、あの子？めっちゃかわいくね？」
「マジで？暁ハートさんの見間違いじゃなく？」
「なんだろう、純粋な怒りがこみ上げてきてるんだが」
　ヤバい、なんかヘイトが溜まってきてる……いやまて、これはチャンスだ。今こいつらは紅音に注目してて俺への注意は散漫だ。脱出するなら今しかない。
「おい、あの子が本当にお前の彼女…てあれ？……あっ！」
「フレに呼ばれたんで部屋抜けますね^^」
「待てコラ、ってはやっ！」
　ふはははは、紅音と一緒に走ってきたんだ、そう簡単に追いつけると思うなよ！

□

　初めてきた高校の校門で、楽郎さんを待ち続ける。なんだか注目を集めてしまっている気がするけど、これから楽郎さんと一緒にいられると思うと気にならない。部活が休みの時だけではあるけど、こういうときは目一杯楽しみたい。
「あ、楽郎さん！…あれ？」
「待たせたな紅音！早速で悪いが走るぞ！」
「え、わ、わ！」

そういって楽郎さんは私の手を握り、駆けだしていく。私の前を、私を引っ張っていくように。だけど、引っ張られてばかりなのは嫌だ。目標であり、大好きな人である楽郎さん。この人に相応しい私でいるために、いつだって全力を出すんだ！

「なんだかよく分かりませんけど、とにかく走ればいいんですね！得意分野です！」

自分のことが嫌いだった私は、もういない。あの頃の私に誇れるように、私はこれからも挑戦を続ける。

私の一番好きな人の隣で、ずっと！

画面越しのあなたに、精一杯の想いを！

□

【ご協力お願いします！】

秋津茜：突然すみません！皆さんにご相談があるのですが！
モルド：それはいいんだけど、いきなりどうしたの？
ルスト……いつものチャットと違う
オイカッツォ：これ、メンバーにサンラクが入ってないね
鉛筆騎士王：サンラク君…ついに秋津茜ちゃんにハブられるように…
秋津茜：あ、いえ！そういうわけではないです！
秋津茜：ただその、サンラクさんには内緒で準備したいので！
京極：内緒で準備？どういうこと？
秋津茜：サンラクさん、１１月２１日が誕生日らしいんです！だから誕生日プレゼントを用意したいんですけど、何を渡そうか決められなくて…
秋津茜：それで、皆さんからアドバイスを頂きたいと思ったんです！
オイカッツォ：へぇ、あいつもうすぐ誕生日なのか。というかよく知ってるね
モルド：プレゼントを渡すってことは、もしかしてリアルで知り合い？
秋津茜：はい！夏休みの最後にお知り合いになりました！私、る…サンラクさんの妹と同級生だったので、その縁で！
秋津茜：誕生日についても今日その子から聞きました！
鉛筆騎士王：おや、秋津茜ちゃんあの子と友達なんだ。世の中狭いもんだねぇ
秋津茜：え、ペンシルゴンさんも知り合いなんですか!?

鉛筆騎士王：そうだよー、ちょくちょく連絡とってるかな
鉛筆騎士王：というか11月21日っていうと大体3週間後…結構前から用意するんだね
秋津茜：やっぱりつきあい始めて最初の誕生日ですから、思い出に残るものを渡したいんです！だから早いうちから決めようかと！

鉛筆騎士王：うん？
オイカッツォ：は？
ルスト：ん？
モルド：えっ
京極：おや？
サイガ―0：えと、あの、今、その、つきあっていると…
秋津茜：はい！先日からサンラクさんとお付き合いさせていただいてます!!
オイカッツォ：マジ？え、それマジなの??
鉛筆騎士王：おぉう、あのクソゲーに脳を汚染された子に彼女が出来る日が来るとは…
ルスト：二人とも驚きすぎ
鉛筆騎士王：いやだってねえ、付き合いも長い分感慨もひとしおというか
オイカッツォ：正直女性と付き合ってるイメージが沸かないんだよなぁ
鉛筆騎士王：そういえばサイガ妹ちゃんは彼とリアルで知り合いじゃなかったっけ？妹ちゃんも知らなかったの？
サイガ―0：その、彼女が出来た、と言う話は人伝手で知っていました
サイガ―0：ただ、相手が秋津茜さんとまでは知りませんでした
サイガ―0……秋津茜さん、その……おめでとう、ございます
鉛筆騎士王：おっと、私としたことが肝心なことを言い忘れてたよ。おめでとう秋津茜ちゃん！

オイカッツォ：おめでとう。よく考えれば秋津茜さんも割とつっぱ…サンラクと波長合ってると思うし、上手くいくんじゃないかな
ルスト：おめでとう。彼女からもサンラクにネフホロにもっとログインするよう言って
ルスト：むしろ秋津茜も一緒にネフホロをやるべき
モルド：勧誘になってるよルスト…。えと、秋津茜さん、おめでとう
京極：それなら幕末も…と思ったけど、秋津茜さんにはさせちゃいけないような気がするなぁ
京極：それから、おめでとう。末永くお幸せに
秋津茜：ありがとうございます！皆さんにそう言っていただけてすごく嬉しいです！
京極：それにしてもサンラクも水くさい、こういうことは言ってくれればいいのに
ルスト：どこかの二人が煽るからだと思う
鉛筆騎士王：いやいや煽るだなんてとんでもないよ、お祝いの言葉を贈るだけだよ！
オイカッツォ：そうそう、ちょっとしたコミュニケーション！
モルド：信用できない…
京極：名前出してないのに名乗り出てる時点でね
鉛筆騎士王：しかしそういうことならこの私に任せるといいよ、こう言った相談には手慣れているからネ！
オイカッツォ：え、ペンシルゴンが恋愛相談？……???
鉛筆騎士王：どういう意味かなぁカッツォくぅん？
京極：言いたいことはよく分かるよ
ルスト：オイカッツォもサンラクと秋津茜の関係を知ったとき以上に理解できていない
鉛筆騎士王：おおっと予想外のところから飛んできたなぁ！
鉛筆騎士王：というかリアルユニーク２つも発生させてるくせにそれにまったく気付いてないカッツォ君には言われたくないかなぁ！
オイカッツォ：ん？どういうこと？

ルスト：……なるほど
京極：今のやりとりだけでなんとなく察せるかな
モルド：あはは……
オイカッツォ：ちょっと待って、マジで何の話!?
鉛筆騎士王：さて、話戻そっか
鉛筆騎士王：まあまだ誕生日まで期間あるわけだし、今すぐ決めなくちゃ行けないことでもないかな
京極：3週間先だしね。急だったし少し考える時間が合ってもいいと思うけど
モルド：でも手作りとか準備がいるものなら早いうちに決めないと間に合わないんじゃ
サイガ—0：料理などなら練習もした方がいい、のではないかと
ルスト：一応本人にもばれない程度に探りを入れておくべき
鉛筆騎士王：それもそうだね。よし、各自今日一日プレゼントを考えて、明日ココで発表！探りに関しては秋津茜ちゃんがやると流石に感づかれる可能性があるので、サンラク君の妹ちゃんにやってもらう！それで行こう！
秋津茜：はい！ありがとうございます！

「旅狼の皆さんに相談して良かったぁ」
瑠美ちゃんから聞いたときはどうしようと思ったけど、旅浪の皆さんに協力していただけるのはすごく嬉しい。それに、おめでとうって言われたのも。うん、楽郎さんに喜んでもらえるものを頑張って考えなくちゃ！
…ってあれ、さっきのチャットとは別口で何かきてる？

【収録スタジオにお届けします】

オイカッツォ：なにこれ、ていうか3人だけ？

鉛筆騎士王：いやぁ、サンラク君の彼女である秋津茜ちゃんには伝えてもいいかと思ってね
秋津茜：どうしたんですか？
鉛筆騎士王：ある意味このタイミングで発覚して良かったよ。秋津茜ちゃん、今週日曜日のサンラク君の予定って知ってる？
秋津茜：？　聞いてないです。…その、ペンシルゴンさんは知ってらっしゃるんですか？
鉛筆騎士王：知ってるよー。あ、もしかして嫉妬してる？心配しなくてもサンラク君とそういうことは一切ないからね？
秋津茜：そういうわけでは！ただ普段からすごく仲がいいので、その！
オイカッツォ：大丈夫だよ秋津茜さん。俺もサンラクも性格がアレすぎてこいつだけはないってのは一致してただろうから
鉛筆騎士王：私からしてもそうだけど、はっきり断言されると傷つくんだけどぉ!?
オイカッツォ：でもなるほどね。確かに秋津茜さんには伝えてもいいか。おもしろくなりそうだし
オイカッツォ：ただサンラクにバレたらさっきの案件も感づかれるんじゃない？なんで知ってるんだって流れになって
鉛筆騎士王：そこは秋津茜ちゃんに正体気付いてないふりをしてもらうしかないかな。もしくは偶然観てたらなんとなく気付いたとか
鉛筆騎士王：正直バレてもあの子はそこまで気が回らないと思うケド
秋津茜：どういうことですか？
鉛筆騎士王：詳細については当日のお楽しみってことにしとこうかな。ひとまず日曜日１９時にユーガッタＴＶを見るといいよ
鉛筆騎士王：あ、サンラク君にはこのことは内緒ね！
秋津茜：よく分かりませんけど分かりました！楽しみに待っています！

そうして迎えた日曜日。ペンシルゴンさんから言われてたとおり、テレビを付ける。でもどうしてＴＶを見るといいなんて言ったんだろう？もしかして楽郎さんがテレビに出るのかな？でも一体何の番組に…

番組に出てるのはプロゲーマーの魚臣慧さんとアイドルの笹原エイトさん。そして今回の放送は魚臣さん以外にも３人のゲストがいるらしい。ＡＲの最新技術が用いられた演出から現れた３人は…

「あっ！」

３人ともすごい有名人だった。仮面を被っていてはっきり言えるわけじゃないけど、多分シルヴィア・ゴールドバーグさんとアメリア・サリヴァンさん、それに…

「顔隠しさんだ！」

顔隠しさん。ＧＧＣエキシヴィションマッチで名前隠しと一緒に現れ、世界一の格ゲーマーであるシルヴィア・ゴールドバーグさんと互角の勝負を繰り広げた末、あと一歩のところまで追い詰めた謎の人物。メディアに登場したのは一度きりで、今でもその正体について憶測が飛び交ってるらしい。

もしかしてこの３人で試合するのかな!?すごく楽しみ……あ、いけない！目的を見失うところだった！ペンシルゴンさんが見るように言ってた意味を調べないと！…てあれ？

「顔隠しさんが腰に付けてるのって、確かライオットブラッド…だっけ？楽郎さんもよく飲んでるし、おんなじパッケージだった気がするなぁ」

よくみれば、顔隠しさんの背格好や、細かい動き、声はボイスチェンジャー？がかかってるけど…話し方とかが楽郎さんと似てる気がするし、もしかして……あっ、ペンシルゴンさんから連絡！

【正解発表！】

鉛筆騎士王：さぁて、分かったかな秋津茜ちゃん？

秋津茜：あの、もしかして顔隠しさんって!?

鉛筆騎士王：その通り！しかし、サンラク君に関することでこのＴＶ見ろって言われれば推測は立てやすいだろうけど、それだけで判別できる辺り愛だね！あ、このことは秘密だからね？ばれたら色々と面倒だから

秋津茜：あ、はい！でもどうしてペンシルゴンさんは知ってるんですか？

鉛筆騎士王：まあ私も当事者みたいなもんだからね。そこは深く考えなくていいよ

鉛筆騎士王：とりあえず画面の先で話も進んでるみたいだし、私たちもみてよっか

秋津茜：はい！教えてくださってありがとうございます！

顔隠しさんが楽郎さん。やっぱり楽郎さんはすごいなあ。でもそれなら楽郎さんは……あれ？テレビの上にテロップが流れてる。

「視聴者応募企画…？」

■

「さて、ネット配信の方も終わりの時間が近づいてきました！いやー、あまりに盛り上がりすぎてエイトちゃんの手に負えなくなった今回の放送ですけど、いざ終わるとなるとさみしくなってきますね！」

やっと終わるのかこの番組…。アメリア・サリヴァンとの試合が終わった後もまだ試合する羽目になるわ、質問コーナーで色々聞かれまくるわ、途中意識が飛んだ…ような気がする雑談やら、いろいろありすぎてマジで疲れた…。はよ帰って寝たい…。

「じゃあ最後の企画！視聴者対談式質問コーナーと行きましょう！」

「対談式…質問コーナー？ミスエイト、それってさっきやったのとは違うの？」

「あれはコメント返信って形でしたけど、こっちはまた違う感じです！どうやらテレビ放送の時にテロップで視聴者の人たちに応募かけてたみたいで、ここにいる皆さんと直にお話しできるって企画です！……なんか聞かされてないことばかりで正直私も泣きそうです…」

げ、マジか。また面倒そうな企画だなー。話せって言われてもなぁ、俺ただの一般人だからそんな会話スキル求められてもきついんだけど。

「時間もさほどあるわけではないですけど、当選された方が希望する人と1対1で話す、というのを皆さんに一度ずつやっていただく形になります！選ばれた人やラッキーですよー、聞いたところものすごい倍率だったみたいですから！」

「テレビ放送ってことは日本国内だけか。よかったな魚臣、魔境の民がくる可能性高いぞ」

「何にも良くないんだけどなぁ、今日だけでどれだけ削られてることか…」

「ケイダメよ、そんな顔してちゃ！ほら、もっとポジティブ！」

あー、そうやってグイグイ押されてるところも魔境からすれば格好のネタなんだろなぁ。よほどのことがない限り大抵のネタでイケる連中だし。ただ今回の場合顔隠しがかけ算に組み込まれる可能性が高いので、全米一さんには是非とも頑張って欲しい。まぁ仮面付けてるから俺自身にはダメージないわけだが。

「さあ、それでは時間も押してますしさっそくいきましょう！最初は

顔隠しさんですね。当選された方のＰＮは…ドラゴンフライさんです！」
　ん？ドラゴンフライ？どこかで聞いたことがある名前…いや偶然だろう、倍率すごかったみたいだしいくら何でも…。…いや紅音ならあり得るか？うん、あり得そうだな、段々そうとしか思えなくなってきたわ。
「あ、繋がったみたいですね！じゃあ顔隠しさん、お願いします！」
「あ、はい。…えー、ドラゴンフライさん聞こえますかー？」
『はい、聞こえます！わ、ホントに私の声が流れてる！』
　はい的中、やっぱ紅音だったわ。ホントにリアルラックどうなってんだ。ていうかピンポイントに顔隠しを指名するなんて、もしかしてバレてる？…いやこちらは流石に違うだろう。紅音のことだから正体なんて深く考えず、普通に楽しみながら見てたんじゃないだろうか。
『えと、ドラゴンフライといいます！先程の試合をみて、すごく感動しました！最後に使っていた技？は私は詳しく知らないんですけど、とてもかっこよかったです！』
「あー、そういってもらえて嬉しいです。さきほども言ったことではあるんですけど、俺自身マスタースカイを成功させることを目標にしていた一面が大きくありましたので」
『それに、最後の技だけじゃなくて、試合全体で楽しんでいるというのがすごく伝わってきました！前のＧＧＣの時もそうでしたけど、世界一位と二位のプロゲーマーの方々を相手にしてるのに、すごいと思います！』
「あ、はい。ありがとうございます」
……
……
…
「あのー、ドラゴンフライさん？これ、一応質問コーナーなんでそろそろ…」
『あ、そうでした！それじゃあその、お聞きしたいんですけど……顔

隠しさんは、プロゲーマーになりたいんですか？』
……なりたいんですか、ね。やっぱ気付かれてたのか。どうするかな、あんまりリアバレに繋がることは言いたくないんだが…。
「…正直に言えば、そういったことは考えてません。これから先どうしたいのか、まだ自分自身でも決めかねているところなので」
「…え？顔隠しさん、それって…」
「サ……顔隠し？その辺いっていいの？」
「んー、あんま良くないだろうけど……まぁ、今回は特別ってことで」
「顔隠しがいいならこっちは特に何も言わないけどね。……なんとなく理由分かったし」
ぶっちゃけ、ここでこの質問に答える必要はない。この場は適当にはぐらかして、帰ってから言えばいいだけではある。ただ……紅音もＰＮとはいえ素の声をさらしているし、何より真剣に聞いてきている。いつもまっすぐではあるが、ここまで本気と言うことも多くない。だからこそ、こちらも偽らず応えていきたい。
ていうか、カッツォのやつ後半なんて言った？まあいいや、今は紅音の質問に答えるのが先だ。
「ただ現時点で言えることがあるとすれば、これから先の未来、どういった形であってもゲームと関わらない、なんてことは絶対にないかなと。
俺はゲームが好きで、そのゲームをクリアした瞬間や…今日みたいな、浪漫を叶えた瞬間。それを達成したときの喜びを、ずっと噛みしめていたいと思ってます。ただ、プロゲーマーになるのなら、『趣味』だけではすまない『義務』となるので、そこがネックになってる感じです」
『じゃあ、もしその悩みが解消されたら、その時はプロゲーマーになるってことですか？』
「あくまでもしかしたら、という話です。今後の身の振り方については、以前から尊敬する人に相談に乗ってもらってるんですよね。で、現状だとそちらのチャートで進んでいくかなと思ってるんで」
『そうなんですか…。でも、顔隠しさんがどんな進路を選んでも、私は

ずっと顔隠しさんを応援し続けます！』
「ん？」
『どこまでも楽しそうに、ずっと前を進み続ける。そんな顔隠しさんのことが、私は大好きです!!』
「Ｗｏｗ！」
『今後こういう風に試合をされるかは分からないですけど、もし機会があるなら教えてください！絶対に観ます！』
「え、え!?」
『顔隠しさんに負けないよう、私も頑張っていきます!!顔隠しさんにふさわしい私でいたいから!!』
「ちょ!?」
『あ、もう時間ですね。とても楽しかったです！今日はありがとうございました!!』

嵐のように言うことを言って去って行った紅音。残された者達は当然…
「すごかったわ！まるで愛の告白みたいなセリフだったわね！聞いてたこっちまで顔が赤くなってたわ！」
「自らの気持ちを素直に表現した彼女を、私は肯定します」
「いやほんとすごかった…うん、ほんと、あらゆる意味でお似合いだった」
「ていうかどちらとも結構すごいこといってませんでした!?コメント欄また地獄みたいになってるんですけど!?」
他の連中が周りでいろいろと言ってるな。うん、言ってるんだが……いやこれどうすりゃいいんだ？正直何を言っても火に油を注ぐことになる未来しか見えないし、うーん……よし。
「笹原氏、時間も押してるし、次の人を呼ぼう」
「え、この状況で次行くんですか!?」

対処できないことは未来にぶん投げる、後のことは知らん！という

か今の状況でまともに返すの無理！俺自身顔真っ赤で思考がまともじゃないの自覚してるし！

傍にある温もり

■

「こんにちは楽郎さん！どうぞお上がりください！　それから…お誕生日おめでとうございます！」
「お、おぅ。…うん、ありがとう」
　１１月２１日。自分でも大して意識していなかったが、俺の誕生日。紅音には特に言った覚えもなかったが、どうやら瑠美が伝えていたらしい。紅音からお祝いしたいと言われ、紅音の家でご相伴にあずかることとなったのだが…紅音の家に上がるのは初めてだから緊張するな…。
　いや待て、よく考えたら紅音のご家族と初めて会うことになるんじゃないか？ヤバいぞ、挨拶とかなにも考えてなかった。とりあえずこれまでのゲームの経験、そう、ラブクロックは恋愛シミュレーションだし参考に…ならないな。あの感情を殺して留学者の選別をするゲームの何を参考にするつもりだ。
「あー、紅音、とりあえず初めて上がるわけだし、親御さんに挨拶とかしたいんだけど」
「お父さんとお母さんですか？今日は二人とも出かけるとかでいませんよ？」
「えっ」
　もしかして二人きり？若い男女が、一つ屋根の下で、二人きり…当然なにも起こらないわけがなく…。…くっ、駄目だ思考がディープスローターに汚染され始めてる、邪念を振り払わなければ！
「そ、そういえば、今日は何を食べるんだ？」
「今日はすき焼きです！」
「…すき焼き？　二人ですき焼きを食べるのか？」
「はい！今日は楽郎さんの誕生日って言うおめでたい日ですから！」

あー、すき焼きって言うと大人数で集まって食べるイメージが強かったけど…そうだよな、少人数でも食べられるよな。大体大晦日に食べるイメージが付いてるけど、うちの場合は親族で集まって食べるんだよな…。そして酔っ払ってカオスになるからみんなして甘酒を飲むという…。

…

……

……

「それじゃあこれから準備しますね！楽郎さんは座って待っててください、すぐ作りますので！」

そう言って調理を始めた紅音の手際は、想定していたものよりもずっとよかった。こう言っちゃアレだが、いろんな意味で大らかだし、料理とかも苦手だとばかり勝手に思っていたんだが。

あ、もしかしてそういうことなのか？

「新鮮なお野菜をたくさん使ってますからね。たくさん食べてください！」

「おー、確かに上手そうだな。だいぶ練習したんだな？」

「練習、ですか？料理は普段からお母さんのお手伝いしてるので得意ですよ？」

「あれ、そうなのか？ここ最近手に絆創膏貼ってること多かったから包丁で指切ったのかと」

そう、ここ最近紅音の手には至る所に絆創膏が貼ってあった。気にはなってたが聞いてもはぐらかされてたし、紅音のことだから何かに打ち込んでいる結果じゃないかと思い深くは追求していなかった。

「あ、そういうことですか!?えーと、その…もう少ししたら話すつもりなので、それまで待っててもらいたいです！」

「何か理由あるなら話したくなったときでいいぞ。…お、もうそろそろ食えるんじゃないか？」

「あ、そうですね！それじゃあ…」

「「いただきます」」

早速鍋に箸を延ばし、皿に取り分ける。春菊、しらたき、ネギ、牛肉、白菜、豆腐、春菊、エノキ、ネギ、エノキ、白菜、春菊……ホントに野菜多いな!?

「あ、楽郎さん楽郎さん！」

「ん？」

「はい、あーん！」

こ、これは…デートイベントの定番、というものなのだろうか。ただその、食べるものがすき焼きだと色気もなにもないというか…。

「あ、あーん…」

「どうですか!?おいしいですか!?」

「…うん、上手い」

「そうですか、お口に合って良かったです！」

まあ、実際美味しいし、これはこれで俺たちらしいかもしれないし、いいか。

…

……

……

「…それじゃあ、もう遅いし帰るわ。すき焼き上手かったよ」

「いいえ、お粗末様でした！私も楽郎さんの誕生日をお祝いできて良かったです！」

11月下旬にもなると日が落ちるのも早い。平日なので明日も当然学校があるし、遅くなる前に帰らなければならない。

「あ、戸締まりはちゃんとするんだぞ。その、紅音も女の子だからな、夜一人でいるのも危ないしな」

「あ、お父さんとお母さん、もうすぐ帰ってくるって連絡があったので大丈夫ですよ？」

よぉーし心の中のディプスロは完全に去った！いやなにもする気はなかったが、軽率な行動をして信頼を失うようなことはしたくないしな！

「じゃあ、おやす…」

「あ、ちょっと待ってください！渡したいものがあるので！」

「渡したいもの？」
「はい！お誕生日プレゼントです！」
誕生日プレゼント？紅音が料理してくれたすき焼きがプレゼントだとばかり思っていたんだが違ったのか？
疑問を投げかける前に紅音は家の中に入っていき、そしてすぐに袋を携え戻ってきた。
「お待たせしました！誕生日プレゼントです、受け取ってください！」
「うん。…その、ここで開けていいか？」
「はい！出来れば、今日帰るときにでも使ってくださると嬉しいです！」
帰るときに使う？一体何を……あ。
「……マフラー？」
中に入っていたのは赤く染まったマフラー。一抹の寂寥と同時に燃えるような暖かさも感じる、黄赤色。
「はい！一生懸命編みました！」
「え、紅音が作ったのか？これを？」
「その、私一人では出来なかったんですけど、サイガ—0さん……玲さんが手伝ってくださいました」
「ちょっと待って。え、玲氏？もしかして知り合いなの？」
「楽郎さんの誕生日に何をプレゼントしようか、旅狼の皆さんに相談に乗ってもらってたんです。それでマフラーはどうかと言う話になって、だけど私一人では編み方が分からないって言ったら、家も近いみたいだから玲さんが教えてくださると言ってくれて…」
え、なに。もしかして俺と紅音が付き合ってるのバレてるの？あの外道連中に？……あいつら絶対おもしろがってただろうなぁ…。
「…あ、もしかして手の怪我って…」
——慣れない作業で大変だっただろう。手の至る所に絆創膏が張り付いているということは、それだけ痛い思いをしたということ。それでもこのマフラーを作り上げ、プレゼントとして手渡してくれた紅音。

胸が温かくなる。この子を好きになって良かったと、この子に好きになってもらえてよかったと…これからも、この子に相応しい自分でありたいと、強く思う。

「…最高のプレゼント、ありがとう紅音。大切に使うよ」
「はい！ありがとうございます！…あ、その、今付けますか？」
「ん？そうだな。せっかくだしすぐにでも使わせてもらうよ」
「じゃあその、私が巻いてもいいですか!?」
「え？まあ紅音がそうしたいならいいけど…」
そう聞くなり、紅音は手にあるマフラーをとり、俺の首に巻こうと……ん？巻くだけにしてはやけに顔を近づけて……

「――――大好きです楽郎さん。ずっとそばにいてください」

「なっ!?!?」
「え、えっと、それじゃあおやすみなさい!!」
耳元でささやいたと思ったら即座にマフラーを巻き付け、逃げるように家に入っていった紅音。紅音の顔も真っ赤だったのを見るにあちらも相当恥ずかしかったのだろうが……
「ふ、不意打ちは卑怯だろ……！」
すっかり冷え込みを増した夜空の下、マフラーの温もりと紅音のひたむきさ、そして最後の爆弾発言…いろんな意味で暖かくなってしまった俺だけが取り残されてしまった。